

歴史的思考力の育成を図るアメリカ歴史教育改革の研究：ディシプリン・ギャップの生起要因と改革の可能性

川上, 具美

<https://doi.org/10.15017/1441008>

出版情報：九州大学, 2013, 博士（教育学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：全文ファイル公表済



氏 名 : 川 上 具 美

論文題名 : 歴史的思考力の育成を図るアメリカ歴史教育改革の研究
—ディシプリン・ギャップの生起要因と改革の可能性—

区 分 : 甲

論 文 内 容 の 要 旨

本稿は、アメリカの歴史教育が目指している歴史的思考力の育成について、教室における実践の段階まで浸透していないという実態、つまり実践との間に生じている歴史教育上のディシプリン・ギャップに着目し、その背景と要因を明らかにしたものである。ディシプリン・ギャップとは、大学では存在論的歴史学が主流であるのに対し、中等教育までの歴史教育では認識論的歴史学が主流であるという学問上の齟齬のことを指している。本稿における研究では、歴史ナショナル・スタンダードや社会科の州スタンダードにある歴史観や、教育庁や教育委員会によって出される社会科コアカリキュラムや標準テストに見られる歴史観、そして歴史科教師の養成コースや歴史教育の実践に見られる歴史観にも焦点をあて、それぞれの歴史観に見られるディシプリン・ギャップについて分析を行った。

まず序章では、歴史的思考力の定義について歴史学の流れや先行研究の分析から、異なる時代や場所における出来事について様々な資料を基に想像したり解釈したりする力、また批判する思考する力と定義した。そして、アメリカの歴史教育では、歴史的思考力を要求する存在論的歴史学の進展と、また高校教育までの認識論的な歴史教育との間で齟齬が生じ、ディシプリン・ギャップが生じてきたことについて論じた。

次に第1章では、存在論的歴史学に見られる多様な歴史観がマイノリティの歴史観を取り入れたものであることと、これに対する保守派の批判が WASP 文化を中心としたナショナル・アイデンティティの崩壊を危惧するものであることについて論じた。保守派による論争の結果、合衆国史が西洋的な原理に基づくアメリカ民主主義を土台とすることで WASP 中心史観に修正されたことに注目し、これがスタンダードに基づく改革、つまり州スタンダードの策定や標準テストの実施から、アメリカの歴史教育は WASP 文化を中心とする歴史観を持つという認識論的な歴史教育に回帰したことを明らかにした。

第2章では、ナショナル・スタンダードの策定後に各州で取り入れられていったスタンダード策定による歴史教育に注目し、特に先の保守派による論争が起こったニューヨーク州を事例としながら、その州政府が発行する歴史カリキュラムの持つ歴史観について分析を行った。その結果、ニューヨーク州教育庁発行の歴史スタンダードとカリキュラム、標準テストのそれぞれが示す歴史認識や解釈との間にはディシプリン・ギャップがあることがわかった。つまり、コアカリキュラムや標準テストは、政党や政府の立場からの歴史的な理解を求めるもので、様々な歴史観や自由な史料解釈を認めるものではないことを明らかにした。

第3章では、標準テストを社会科に導入していないイリノイ州の歴史教育カリキュラムに焦点をあて、州スタンダードや社会科パフォーマンス評価基準、社会科評価フレームワークが持つ歴史観の分析を行った。その結果、それらのカリキュラムは歴史的思考力の育成を目指すものであり、存在論的な歴史学の立場に立っていることが明確となった。また、イリノイ州の歴史教師の養成にも注目し、大学における歴史教育コースでも歴史的思考力の育成を中心に、社会史やマイノリティから見た様々な歴史観、地

域史観をそのコースに取り入れながら、歴史科教師の育成を図っている実態を明らかにした。

第4章では、第3章で扱った歴史教育コースを履修する学生に焦点を当て、彼らの歴史観や歴史教育観について行った調査結果について記した。調査から、学生が様々な歴史観を教育実習に持ち込むことに躊躇し、起こる可能性のある批判やトラブルに恐れを抱いていることを明らかにした。先行研究では明らかにされてこなかったディシプリン・ギャップの生起要因、即ち歴史スタンダード論争を通じて行われた新しい歴史教育に対する保守派からの批判に対して実習生も教師もナーバスとなり、そのことで歴史教育実践においてマイノリティから見た歴史観や社会史を使った歴史教育を回避していることが判明した。

第5章では、第4章において明らかにした歴史教育におけるディシプリン・ギャップ解決のための方策として、「協働的教育実習活動」のプロジェクトと実習生とのネットワーク構築に注目し、その可能性や意義について考察を行なった。その結果、協働プロジェクトやネットワークの構築による支援は実習生が実習前に彼らの期待感や実習準備への自信を高めることに寄与し、また他者からの支援やアドバイスを求めやすい環境を整えるといった意義があることを明らかにした。

本稿では、歴史教育における歴史的思考力の育成と歴史学上のディシプリン・ギャップに焦点をあてることで、これまでのアメリカ歴史カリキュラム研究を実践レベルでの実像にまで深めることができた。また、事例として州レベルの教育に焦点をあてる際に、一つの州の研究だけでは浮き彫りになりにくいイリノイ州の特殊性を、保守派による教育が進むニューヨーク州を参考事例として挙げ比較することで明らかとなった。本研究において用いた州の比較を行なう研究方法は、ディシプリン・ギャップの生起要因についてのより精密な分析を可能にしたといえる。